令和４年度
聖籠町　幼児教育推進体制を活用した地域の幼児教育の質向上強化事業
有識者会議　次第

日時　　令和５年２月２２日（水）１５時～１６時３０分

場所　　聖籠町役場　大会議室

次第

１　開会

２　説明・協議

（１）令和４年度本事業取組報告

① 幼児教育の質と指導力の向上

② 複数園と小学校の円滑な連携・接続方法の構築

③ 聖籠町の幼児教育の積極的な発信

④ せいろう幼稚園の遊びの「実践集録」作成

⑤ 幼児教育アドバイザーの質の向上

⑥ 令和５年度の取組について

（２）ご助言・ご感想・情報交換

３　閉会

令和４年度　幼児教育推進事業　有識者会議　議事録

【協議】

事務局：　最初に、「一人一人のよさや学びを次へつなぎ伸ばす個人記録」についてご意見をいただきいと思います。

委　員：　具体的にどういうことを書いてもらうことを想定しているのでしょうか。

事務局：　この子は今年度こういうことをこつこつがんばっていたとか、できなかったことがこんなふうにできるようになったとか、次の学年でぜひ引き継いで伸ばしていってほしい良さやがんばりを端的に記入します。

委　員：　エピソードを書いていくようなイメージでしょうか。例えば泥遊びの時に、泥団子を綺麗になるまであきらめないでつくっていたとか。

事務局：　エピソードの中からの場合もありますが、細かなエピソードの記入ではないと考えます。

委　員：　記入の時期は学年末でしょうか。それともその子の育ちに応じて順次書き溜めていくのでしょうか。

事務局：　順次書き溜めていき、その中から最終的に次の学年へぜひこれを引き継いでほしいというのは学年末近くになると考えます。

委　員：　これを見せてもらってすごいなあと思っているのですが、今の話の中で特別支援教育に似ているところがあると思います。一人一人のよさやがんばりという個人の記録を作り、それを要録にもつなげていく。特別支援教育では、個別の支援計画を作ることになっていて、特別支援学校ではすべて一人一人に指導計画があり、そこから要録ができていくのですが、その個別の指導計画の前提になっているのは個別の教育支援計画です。教育支援計画というのは、少し先のことをよんで、三年先にはどうなってほしいという約三年スパンで考えます。教育支援計画は、支援するのが特別支援学校や医療機関ですが、この場合はそこまでいらないと思いますが、まずは三年スパンの大きな目標があり、個別の指導計画は学習計画ですので園の活動も同じですが、三年先この子はこうなってほしいという願いがあり、この一年間でどこまでもっていくかまず長期目標を立てます。それを学校は３学期制ですので、この１学期でどこまで目標にするかというのが中期目標で、項目別に実際に何をするかというのが短期目標です。だから、そういうものは参考になると思います。また、これを見て思うのは、特別支援学校の自立活動に似ていま

す。例えばせいろう幼稚園の実践集録の４ページに成果目標とありますが、まず個別の指導計画を作るには、その子の実態から目標を設定しないといけないわけで、そうすると成果目標に３歳・４歳・５歳とあるけれども、これは大きな３歳４歳のくくりです。例えば基本的な生活習慣で３歳を見ると、「身の回りのことを自分でする子」とあるけれど、同じ３歳でも一人一人全然違うと思います。だからこそ、一人一人のものがほしいわけです。

例えば、特別支援学校では、一年間でこういうことをやりたいという全体目標があったら、これを一人一人にくだくと一年でできることは何かという目標ができます。それをどんどん個人におろしていき、目標に対してやってきたことを書いていって最終的にその目標に対してどうなったか評価を書き、その評価を要録に書きます。つまり個別の指導計画の最後の評価と要録の項目を同じように並べます。

目標を立てるにはまず一人一人の実態を調べ、一応３歳４歳５歳の大体の目標を設定し、それに対して個人にどんな目標をもつかを考えます。ただ、この成果目標を見たときに、３歳４歳５歳とただ一年ごとに課題が一つ増えていくような内容に感じます。つまり、４歳５歳の基本的生活習慣でみると、「身に付けたことを丁寧にする子」、その次が「自ら気付き、身に付けたことを丁寧にする子」と、同じ繰り返しで少し負荷がかかっただけです。子ども主導の立て方よりは、むしろ発達課題として３歳４歳５歳と身に付けていくものと関係してこの目標を設定すると、もう少し内容が深くなると思います。というのは、４歳の中でも多分、自ら気付き身に付けたことを丁寧にする子もいる可能性があるので、少し課題が上がっていくだけではなく、発達課題から考えるともう少し違う目標でもいいのかなと思います。個別の指導計画なども参考になるかなという意見です。

事務局：　ありがとうございました。特別支援の支援計画や個別の指導計画の考え方というのも一つであり、その要素を取り入れながら記述をしていくということも大事なのではないかというご意見いただきました。

委　員：　一番最初に個人記録を見たとき、小学校的な視点で、いわゆるキャリアパスポートに繋がるのかなと思いました。ただ幼児教育を小学校に繋げるといったときに、できたことやできるようになったことを記録していくということが、逆に小学校的な視点であるなとも感じました。例えば、幼児教育の中でエピソードとしていろいろ記録を重ねていきながら、幼児期の終わりまでに育ってほしい１０の姿が、短期や一年通した中でどの程度見られているか、今の発達段階に応じて記録を取りながら見ていくということが行われていると思います。年度末に何ができるようになったという形のものが、本当にその子一人一人の育ちを小学校に繋いでいくことになるのかなと思います。それは、幼児教育の中で各園の先生方が短期目標や一年の目標に照らし合わせて記録を取っていきながらの集大成であると思うので、要録との関連性をもう少し精査するべきだと思います。

委　員：　今お話があったように、子どもの成長の評価はできるとかできないとかではないと思います。それは皆さんももちろんそうだと思いますが、例えばこの個人記録に３歳児の遊び

を通した学びの様子を記述するとしたら、やはりまずは年度末ではなくてある程度のスパンの中で子どもたちの様子を見て、ここのこのきっかけでこの子は今すごく成長してるねというタイミングが一人一人に必ずあると思います。そういうポイントを書き溜めていくという作業は、保育士にとっても幼稚園教育にとっても非常に大事なことだと思います。ただ、それが個人記録となったときに、義務になってしまうと辛くなるというのは私も現場を長く経験しているので、職員の皆さんが保育にかけるエネルギーをそれに費やしてしまわないかということを少し心配に思います。考えていらっしゃることは非常に素晴らしいことだと思いますが、どのように進めていくかというところをもう少し精査しながら考えていった方がいいかなと思います。

事務局：　ありがとうございます。評価の時期として、その子どもの成長のスパンでいろいろ伸びる時もあれば少し停滞しているときもあるので、その都度その都度を捉えて記述をするのがいいのではないかということ。義務になってしまうと辛くなってしまうところもあるので、書く時期やタイミングなどこんな形で進めると無理なく進んでいくのではないかということがあればぜひお聞かせいただきたいと思います。

委　員：　質問ですが、園からの情報を小学校に引き継いで、また園の先生が見たいと言った場合は、小学校の先生が書いたものを園に戻すということをクラウドでできるのでしょうか。どんな成長をしているか、小学校の先生のコメントを園でも見て何かできるといいなと思いました。

事務局：　個人記録については、基本的には園から小学校に引き継いだら、小学校で書いたものをまた園に戻すという目的で書いているものではなく、その子どもの成長をその次の学年、次の学年へという形で引き継ぐためのものと考えています。ただ、おっしゃっていただいたように、園の先生たちがどんなふうに成長しているのか気になるところがありて、そういう活用方法もあるのかなと新しい視点をいただいたと思います。

委　員：　クラウドのところに例えばそのシートがあって、園の先生が書いたものを小学校の先生や園の先生がいつでも見られるようになっているのでしょうか。

事務局：　今の現状としてはボックスの ID パスワードを園では持っていないので、園からボックスに情報をあげたり、園から見たりということはできない状況です。なので、データにパスワードをかけて教育委員会に出していただいて、それを教育委員会からボックスにあげるというようなことを想定しています。

事務局：　個人記録への記入の仕方とか、タイミングというところが今話題になっていますが、いかがでしょうか？

委　員：　記入ということではなくて、小学校で受け取ったらどう活かしていくかという観点か

らお話したいと思います。要するに、個人記録は園から小学校に進学してきた子どもたちがそこで自分の力を最大限発揮できるように、そこからジャンプアップさせていくというイメージがあると思います。そう考えると、小学校としては情報があればあるだけ嬉しいです。ただ、情報過多になるとそれを活かしきれない部分がおそらくあると思いますし、逆に焦点化されすぎるとその子を狭く捉えてしまう可能性もあると思います。だから、その兼ね合いがとても難しいと思います。そうすると、やはり園の先生側から、この子のこれは小学校で特に力を伸ばすのがおすすめですよというポイントがあらかじめ記されているというのは、小学校にはとても役立つと思います。それを活かして子どもたちに指導していけることが多分あると思います。書く分量は、もしかすると個々によって違うのかもしれませんが、そういう視点で何を小学校に伝えていくのかというところは、やはり選ぶべきだと思います。あとは、小学校側としては結局丸ごと子どもたちを捉えたいということもあるので、スタートカリキュラムを進める中で、そういう視点をもちながらも子どもたちの活動の状況を見て、丸ごと捉えて子どもたちも個としてそれから集団として育てていくことになると思います。その一助になるという形であればと思います。

そういう観点からこの個人記録をどう記述するかと考えると、やはり書くタイミングや書く内容に大きく左右されるだろうと思います。書くタイミングはいろいろあると思いますが、特徴的な部分で特にここはこの子に伸びてほしいなという観点で記述する。それは、１０の姿の窓からなのか、それとも５領域の育ちなのか、どちらがいいのか分からないですが、そこは園の先生方から小学校に期待する内容なので、記述の仕方を検討いただければと思います。

それから、案２の小学校への引継ぎ資料に長所の欄を入れ込むことについてですが、引継ぎ資料は校長室の引き出しにすぐ取り出せるように今までの資料が全部入っています。当然鍵をかけてありますが、お子さんに困り感があったり、何か活躍したりしたときにすぐに一覧で見られるのでいいなと思います。ただし、引き継いでほしいよさや頑張りというのは先ほど言った観点からすると、ものすごく絞って書かれることになるので、そこは注意が必要かなと思います。小学校ではこの資料をいただいて、主に学級編制や、あるいは子どもたちの人間関係を調整したり、集団活動を組んだりと非常に有効に活用させていただいている資料でもあります。そこに長所の部分が付け加わるというのは、材料としては非常にありがたく役に立つ部分ではありますが、逆にここがスポット的になって子どもへの見方を狭めないようにしたいものだと思います。それは活用する小学校側の意識の問題かもしれませんが、そういう観点から案１の個別の個人記録作成、案２の引継ぎ資料への記述というのを検討されるといいのではないかと思います。

事務局：　ありがとうございました。やはり受け取った側がこの子のここを伸ばしていきたい、あるいは園の方からこの子のここを伸ばしていくことがおすすめですよということをしっかりと焦点化して、ただし焦点化しすぎるとだめですが、そのあたりの内容と分量を工夫しながら記述をしてみたらどうかということですね。特別支援の個人の教育支援計画なども参考に、園の先生がここを伸ばすことがおすすめだというポイントの書き方を考えていきたいと思います。

委　員:　仲の良かった友達と何かできたとか成し遂げたとか、友達関係も変わると思うのですが、そういうものも書いてあるといいなと思いました。

事務局：　何かエピソード的なもので、こんなことができるようになった時に、こういう友達と一緒に頑張ったとかということでしょうか。

委　員：　そうですね。小さいときは仲のよい子が決まっていても小学校や年長でがらっと変わったりするので、小学校ではいじめではないですが、仲間割れで学校に行きたくないとか何かあった時に、そういう仲の良かった子とかも分かるといいのかなと思いました。

事務局：　そこも「かかわる力」に関するところだと思います。例えば普段なかなか接することがなかった友達と協力して、こういう場面でいい学びを見せたことなどを書くと、この子はそういうところがあるんだな、小学校でもそこを伸ばしたいなというヒントになりますね。

委　員：　ツールは万能ではないので、これがどんな目的機能を果たすのかを絞った方がいいと思います。あれもこれもではなく、要録とどう違うのかをもう一回整理するといいと思います。

案１の個人記録は、学びと社会性の二つ柱から書くようになっていて、それを１０の姿の窓から見るのだと思いますが、例えば健康な心と体という窓から学びと社会性をどうやって分けて書くのか少し分からなかったので、何を書くのかがはっきりしないと書きにくいというのはあります。１０の姿の窓から書くのか、どのように書くのかを明確にしてくだされば いいと思います。

案１の個人記録を見ると、少なくとも３歳から２年生までが１枚で見えるのが特徴で、３歳児の担任が書いたものを４歳児の担任がすぐに見ることができて見やすいし、つまり情報がそれほど多くなくてもいい。もう一度、どこまでこのツールを使う意味や機能があるのかを整理して、限定をかけていけばもう少し検討できると思います。

事務局：　ありがとうございます。

委　員：　３歳から小学校２年生まで書くことをきちんと明確にするというのは賛成ですが、小学校に入ったときに一人一人の頑張りをつなぎ伸ばす記録なので、当然３・４・５歳の良さや頑張りを１年生２年生につないで伸ばしていき、それ以降はどうなるかとか、活用されるかという見通しも必要だと思います。そういうところがこの記録の意義であり、３・４・５歳と書かれてきたものを見て幼稚園・保育園の時にこんなことがあったというだけではなく、その後どう活かされるのか、１８歳までとかの資質能力の育成の中で当然活用されるべき見通しをもったものであるべきだと思います。

事務局：　この先は６年生、また中学校へと１２年カリキュラムにつながっていきますが、まずは

幼児教育と小学校でのつながりを大事にして、先へ繋げていきたいと思います。

委　員：　さっき引継ぎ資料が机の脇に入っていると言ったのですが、評価に関わるものは入っていません。どちらかというと、こういうところに配慮をしていただきたいとか、こういうところがこの子の良さですとか、小学校としては一番ありがたい情報です。当然個人情報ですので人権などに配慮が必要で、その提供とか記載にあたってはきちっと手順が必要だと思います。

　先ほどの引き継いでほしいよさや頑張りという部分に注目してお話させていただくと、やはり子どもの長所を書くということは、保育者や学校という教育にとっても、とてもいいことだと思います。そういう文化自体、子どもの長所をしっかり見つめて書きましょうというスタンスは賛成です。

事務局：　ありがとうございます。他に本日発表した今年度の成果と課題についてもご意見いただければと思いますがいかがでしょうか。

委　員：　今年度から新しい体制になって、昨年度まで０歳から２歳が私立保育園で、３歳から５歳が町立こども園だったシステムが、今年から町立幼稚園が３歳から５歳、私立こども園が０歳から５歳ということで、私立こども園では初めて５歳児などを担任した保育士さんもいらっしゃると思います。町立からの派遣教員はいらっしゃいますが、０歳から２歳までの養護が主体の保育から今度平均して５時間の幼児教育の活動をしていくために、それぞれの先生方の経験とか、幼児教育についての理解にもばらつきがあるだろうと思います。そこを改善していくことが、聖籠町さん自身の幼児教育の質の向上に繋がる非常に大事な部分だと思いますので、ぜひ今後も様々な取り組みの中でそういうばらつきを埋めていく研修を頑張ってほしいと思いました。

事務局：　ありがとうございます。

委　員：　聖籠町さんは、この推進事業を活用してあのような多岐にわたる取り組みを精力的に進めていて本当に素晴らしいと思います。特に、保育の何を目指しているのかという部分を保護者の皆さんにしっかり伝えていくことがかなり話題になっていると思いますが、それを非常に精力的に取り組まれていて大変素晴らしいなと思いました。それで、大事なのはそれを発信して、そのリターンであり、部分の評価をしっかり捉えていくことが大事だと思います。そういったものがより多く返ってくると、また発信の仕方などに活かせるのではないかと思いました。

事務局：　ありがとうございました。

委　員：　みんながやりたくてもなかなかできない合同研修会をやっていて素晴らしいと思います。また、これらのことができるのは、二人の幼児教育アドバイザーがいるからだと思います。

このシステムだけをやれと言われても、アドバイザーがいなければ無理だし、他の自治体でやろうと思ったときにアドバイザーがいなければきっと真似できないと思います。聖籠町がこれから１０年、２０年先、どのように継続して取り組んでいけるか興味があります。本日は皆さんのご意見を聞いて勉強になりました。ありがとうございました。

事務局：　大変ありがとうございました。